

抄録集

「足部、足関節の関節鏡を用いた最小侵襲手術」

岩見沢市立病院	整形外科	○林	晴久
小林病院	整形外科	川村	澄人
		羽場	等
		畑山	明広

スポーツ障害において、膝関節、肩関節、肘関節の鏡視下手術は広く行われている。画像診断の進歩、関節鏡の進歩により足関節・足部の鏡視下手術も広まりつつある。我々は、「膝・足関節のスポーツ整形・関節鏡手術」外来を開設し、関節鏡を用いた足関節の軟骨治療、足関節靭帯縫合（あるいは再建）、三角骨障害などの治療を行っており、その概要につき報告する。

「病院におけるアスリート・リハビリテーションの現状と課題」

小林病院 リハビリテーション科

○高橋 良輔
米田 佳
立花 優作
長尾 早紀
徳増 瑠香
本間 康祐
野田 健馬
多田 啓亮
川口 達也
浜崎 龍牙
小倉 惇
久村 浩
山際 雄也
菊地 諒

合同会社 ベストパフォーマンス 東京読売ジャイアンツ
合同会社ベストパフォーマンス

通常の病院におけるリハビリテーションは、病気やケガによる身体機能障害に対し、正常に回復させよう介入するが、アスリートにおいては故障以前よりもさらに上のパフォーマンスを目指す必要があり、通常のリハビリとは違った視点での取り組みが必要となる。また現状の医療保険においては、アスリートに必要なハイパーパフォーマンスを目指すリハビリや、ケガの予防を対象としたリハビリにおいては、アスレチックトレーナーの介入は保険請求において困難な状況がある。当院では地域のアスリートへの貢献策として、利益を度外視したアスリート・リハビリテーションを12年前から実施している。今回我々は、その実際と今後の課題につき検討したので報告する。

「関節リウマチの抗CCP抗体価の変動と疾患活動性の検討」

小林病院 整形外科 リウマチ科看護師

○石上恵美子
木村 光妃
横山 正美
柴田 早苗
小澤 孝子
川村 澄人
餌取 奈々
辻 エミ子
川副 寛子
小松那々子
渡部 理恵

小林病院 整形外科 リウマチ科医師
小林病院 整形外科 リウマチ科クラーク

近年関節リウマチ（以下RA）の診断において、抗環状シトルリン化ペプチド抗体（以下抗CCP抗体）は優れた感度と特異度を有し、さらに抗CCP抗体陽性のRA患者は関節破壊の進行が早いことから、予後不良因子と考えられている。また、その力価と疾患活動性の関連性が示唆されている。本研究では、RAにおける抗CCP抗体の治療前後における力価と疾患活動性の比較検討を行ったので報告する。

「膝前十字靭帯再建材料における人口靭帯の有効性」

小林病院	リハビリテーション科柔道整復師	○野田	健馬
小林病院	リハビリテーション科理学療法士	米田	佳
小林病院	リハビリテーション科柔道整復師	本間	康祐
		多田	啓亮
小林病院	リハビリテーション科トレーナー	高橋	良輔
	小林病院 整形外科医師	川村	澄人

現在、膝前十字靭帯再建術(以下 ACL 再建術)において、様々な移植材料が用いられている。過去には Leads-Keio 人工靭帯が再建材料として用いられていたが再断裂のリスクが高く、現在では自家腱での再建が一般的である。しかし、自家腱での再建では再建靭帯のゆるみが生じる可能性もある。当院では、自家腱と人工靭帯とのハイブリット靭帯を用いた ACL 再建術を行っており、その臨床成績と術後リハビリテーション内容を報告する。

当院でのハイブリット靭帯を用いた過去 2 年間の ACL 再建術 40 例について報告する。男性 24 名(平均年齢 29.3 歳)、女性 16 名(平均年齢 20.8 歳)。術後は当院のプロトコルに従いリハビリテーションを行った。術後、追跡調査可能な 35 人のうち 33 人は受傷以前の活動レベルに到達、残り 2 名に関しては再断裂の疑いはあったもののその後は問題なく 2 名ともに受傷以前の活動レベルに到達した。

ACL 再建術後の再断裂率は 3~12%とされているが、当院でのハイブリット靭帯を用いた再建術での再断裂は 0 件である。

このことから、ACL 再建術に自家腱と人工靭帯とのハイブリット靭帯を用いることで術後再断裂のリスクを下げることに有用だと考えられる。

「野球肘、投球障害肩における東洋医学的手法を応用したリハビリテーション」

小林病院	リハビリテーション科柔道整復師	○多田	啓亮
小林病院	リハビリテーション科理学療法士	米田	佳
小林病院	リハビリテーション科柔道整復師	本間	康祐
		野田	健馬
小林病院	リハビリテーション科トレーナー	高橋	良輔
	小林病院 整形外科医師	川村	澄人

【はじめに】

当院では合谷穴を利用したリハビリテーション(以下リハビリ)を提供している。本研究では野球肩・野球肘患者における合谷穴を利用した関節可動域(以下 ROM)訓練の効果を検証した。

【対象・方法】

野球肩・野球肘の診断を受けた 20 名、対象患者に対し ROM 訓練を肩関節に実施し、介入前後での肩 ROM 外旋(90 度外転位)、内旋(90 度外転位)、水平内転を比較検討した。また、サブグループとして 20 名の患者を一般的なリハビリとして提供される ROM 訓練群(以下 ROM 訓練群)と ROM 訓練とつぼ押しを併用した群(つぼ・ROM 併用群)とに 10 名ずつに分け、比較検討した。(ツボ・ROM 訓練群の可動域計測は介入前、ツボ刺激後、ROM 訓練介入後の計三回)

【結果】

ROM 訓練群の可動域は有意に改善した。つぼ・ROM 併用群の可動域も改善したが、両群の可動域に有意な差は

見られなかった。ツボ・ROM 訓練群のツボ刺激後の可動域も改善がみられた。

【考察】

本研究において、つぼ刺激が肩関節の可動域改善に僅かながらではあるが有効であることを示した。これはつぼ刺激によるリラクゼーション効果が肩関節周囲の筋弛緩をもたらせた影響と考える。このことから筋緊張から起こる可動域制限や疼痛に対し、通常の ROM 訓練とつぼ刺激を併用することによって、より改善を期待出来るものとする。

「人工膝・股関節置換術の前後における重心動揺性の変化」

小林病院	リハビリテーション科柔道整復師	○本間	康祐
小林病院	リハビリテーション科理学療法士	米田	佳
小林病院	リハビリテーション科柔道整復師	野田	健馬
		多田	啓亮
小林病院	リハビリテーション科トレーナー	高橋	良輔
		立花	優作
		長尾	早紀
小林病院	リハビリテーション科柔道整復師	川口	達也
		濱崎	龍牙
		小倉	惇
小林病院	リハビリテーション科トレーナー	徳増	瑠香
	小林病院 整形外科病棟看護師	渡部	理恵子
	小林病院 整形外科医師	川村	澄人

【対象と方法】

本研究の目的は当院における TKA、THA 施行患者における術前後の重心動揺計の変化を検証した。対象は平成 27 年以降に変形性関節症・リウマチにより TKA、THA 施行した患者で術前と術後 6 月後以上経過時点の重心動揺を計測できたものとした。対象は男性 4 名、女性 10 名の計 14 名、平均年齢 70.7 歳、身長 154.0cm、体重 61.3kg であった。性別は男性 4 名、女性 10 名であった。重心動揺計にて開眼・閉眼時の総軌跡長・外周面積・左右最大振幅・前後最大振幅の比較検討を実施した。

【結果】

開眼の術前後の総軌跡長 95.9cm/90.8cm、外周面積 4.1c m²/3.6c m²、左右最大振幅 3.0cm/2.7cm、前後最大振幅 2.9cm/3.0cm であり、有意な差を認めなかった。閉眼の術前後の総軌跡長 122.5cm/135.0cm、外周面積 5.4c m²/6.0c m²、左右最大振幅 3.1cm/3.2cm、前後最大振幅 3.6cm/3.9cm であり、有意な差を認めなかった。

【考察】

本研究では重心動揺での開眼、閉眼の有意差は見られなかった。本研究の対象患者は変形性関節症・リウマチであり、疼痛を主訴としている患者がほとんどである。関節構成体が人工関節に変化し、固有受容器が消失しているにも関わらず、重心動揺計の数値に変化が見られなかったことは患者にとって有益な結果であるとする。

「フレイルとサルコペニアの関連性について

－整形外科入院患者における検討－

小林病院 整形外科病棟看護師 ○鈴木 理恵
渡部理恵子
小林病院 整形外科医師 羽場 等
畑山 明広
川村 澄人

【はじめに】高齢化社会の進展に伴い、身体的フレイルの主体をなす病態としてサルコペニアが注目されている。本研究では当院整形外科入院患者のフレイル及びサルコペニアの有病率と、それぞれの疾患内訳、骨密度・血清25(OH)ビタミンDの関連性について調査したので報告する。

【方法】H29年度 当院整形外科入院患者 65歳以上の男女187名

検討①フレイルの有病率と疾患 検討②サルコペニアの有病率と疾患 検討③フレイルとサルコペニア合併率と疾患 検討④骨粗鬆症の有病率と疾患、フレイル、サルコペニアと骨粗鬆症との関連 検討⑤25(OH)ビタミンD低下と骨粗鬆症、フレイル、サルコペニアとの関連

【結果】①②フレイル・サルコペニアの有病率はそれぞれ58%、35%だった。③フレイルとサルコペニアの合併率は49/187名、26%だった。④⑤骨粗鬆症の有病率は42%だった。フレイル・サルコペニア合併患者49名のうち骨粗鬆症患者は27名(55%)だった。また、25(OH)ビタミンD値20ng/ml未満は92%で、さらに重度の低下である10ng/ml以下は55%であった。

【結論】本研究の結果から、当院の高齢入院患者において、フレイル、サルコペニア、骨密度、血清25(OH)ビタミンD低値が密接に関わっていることが示された。入院患者を要介護者にさせないために、今後様々な介入方法を検討する必要がある。

「フレイルとサルコペニアの関連性について

－リハビリテーション介入の有効性」

小林病院 リハビリテーション科理学療法士 ○米田 佳
小林病院 リハビリテーション科柔道整復師 本間 康祐
小林病院 リハビリテーション科理学療法士 野田 健馬
多田 啓亮
小林病院 リハビリテーション科トレーナー 高橋 良輔
小林病院 整形外科病棟看護師 渡部理恵子
小林病院 整形外科 川村 澄人
畑山 明広
羽場 等

【はじめに】

当院においては整形外科入院患者に対して医師・看護師・理学療法士・柔道整復師・トレーナーの多職種が連携をし、多角的なリハビリテーション（以下リハビリ）を提供している。本調査の目的は、サルコペニア患者に対する多職種・多角的リハビリの効果を調査することとした。

【対象と方法】

